

“思考する道具”と向き合う

矢吹 拓

国立病院機構 栃木医療センター 内科

“I'm sorry, Dave. I'm afraid I can't do that.”

スタンリー・キューブリック監督のSF映画「2001年宇宙の旅」が公開されたのは1968年である。本作品の中でデイヴ・ボーマンら5人の宇宙飛行士は、木星探査ミッションに派遣された。彼らの乗る宇宙船ディスカバリー1号には、知覚を持つ人工知能 HAL-9000 という最新型のコンピュータ・システムが搭載されている。HAL は宇宙船のあちこちに配置された赤い目の球形レンズで、宇宙飛行士の様子を見ながら会話ができる。しかし、そのHAL が奇妙な挙動を示すようになるのである。

HAL の挙動に懸念を抱いたデイヴと同僚は、HAL に会話を聴かれないよう船外活動ポッドに入り、HAL の機能を停止させることにした。だが、HAL は赤いレンズで2人の唇を読んで会話内容を把握し、2人の計画を阻止するために宇宙飛行士たちの殺害を決行する。HAL は人工冬眠中の他の宇宙飛行士たちの生命維持装置を切断した。船外活動をしていたデイヴはそのことに気付かず宇宙船に戻ろうとして、HAL にこう命令する。

“Open the pod bay doors, HAL.”

それに対するHALの応答が、冒頭の台詞である。HALの丁寧かつ冷静な口調がより恐怖を誘う場面であり、高校時代に初めてこの映画を見た時は、鳥肌が立ったのを覚えている。

半世紀以上前に描かれたこの物語は、「人工知能は人間を裏切るのか」という単純な問い以上のものを訴えてくる。HALは暴走した怪物というよりも、矛盾した期待と運命を背負われた存在として描かれている。完全であることを期待しながら、不完全な人間の指示に従うという歪みが生んだ、悲劇とも言えるだろう。



そして2026年のいま、私たちは再び“思考する道具”と向き合っている。生成AIである。

もちろん、現在の生成AIはHALのような自律的意思を持つ存在ではない。だが、問いに答え、文章を整え、鑑別を広げ、論点を整理するその姿は、かつて空想の中で描かれた人工知能の片鱗を思わせる。生成AIに初めて触れた時、多くの人が驚きを感じただろう。完璧ではなく、時に大きく間違えることもある。それでも「思った以上に使える」と感じる瞬間があるのではないだろうか。

新テクノロジーの台頭時は、常に期待と懐疑が入り混じる。インターネット、スマートフォン、SNSと、私たちは、いつも新テクノロジーとの付き合い方を試行錯誤しつつ、現場に取り込んできた。生成AIもまた、その延長線上にあると思う。医療現場では、外来での情報整理、病棟でのカンファレンス準備、退院支援の文書作成、教育におけるフィードバック、研究計画の構想、制度理解の補助、論文内容の要約など、生成AIが医療現場で果たす役割への期待は非常に大きい。

もちろん誤情報、ハルシネーション、バイアス、個人情報管理、過度な依存など、懸念はある。だからこそ重要なのは、「使うべきか、使わぬべきか」という二択ではなく、「どう使うか」である。診療の主体は常に患者であり、最終的な判断と責任は私たちにある。生成AIはあくまでその補助であることが、本特集でも繰り返し語られている。HALの物語が示したのは、技術の脅威だけではない。技術をどう用いるかという、人間側の成熟の課題でもあると思う。

この“思考する道具”は、あなたの臨床現場で何に使えるだろうか？ ポッド・ベイのドアを開けるのは、AIであってはならない。ドアを開くのは、私たち自身なのである。